

時代
摸画

遊家奇人譜

下

911.3
八
下

能事家人後世下

竹窓玄玄一遠行 蓮座書事 冬行

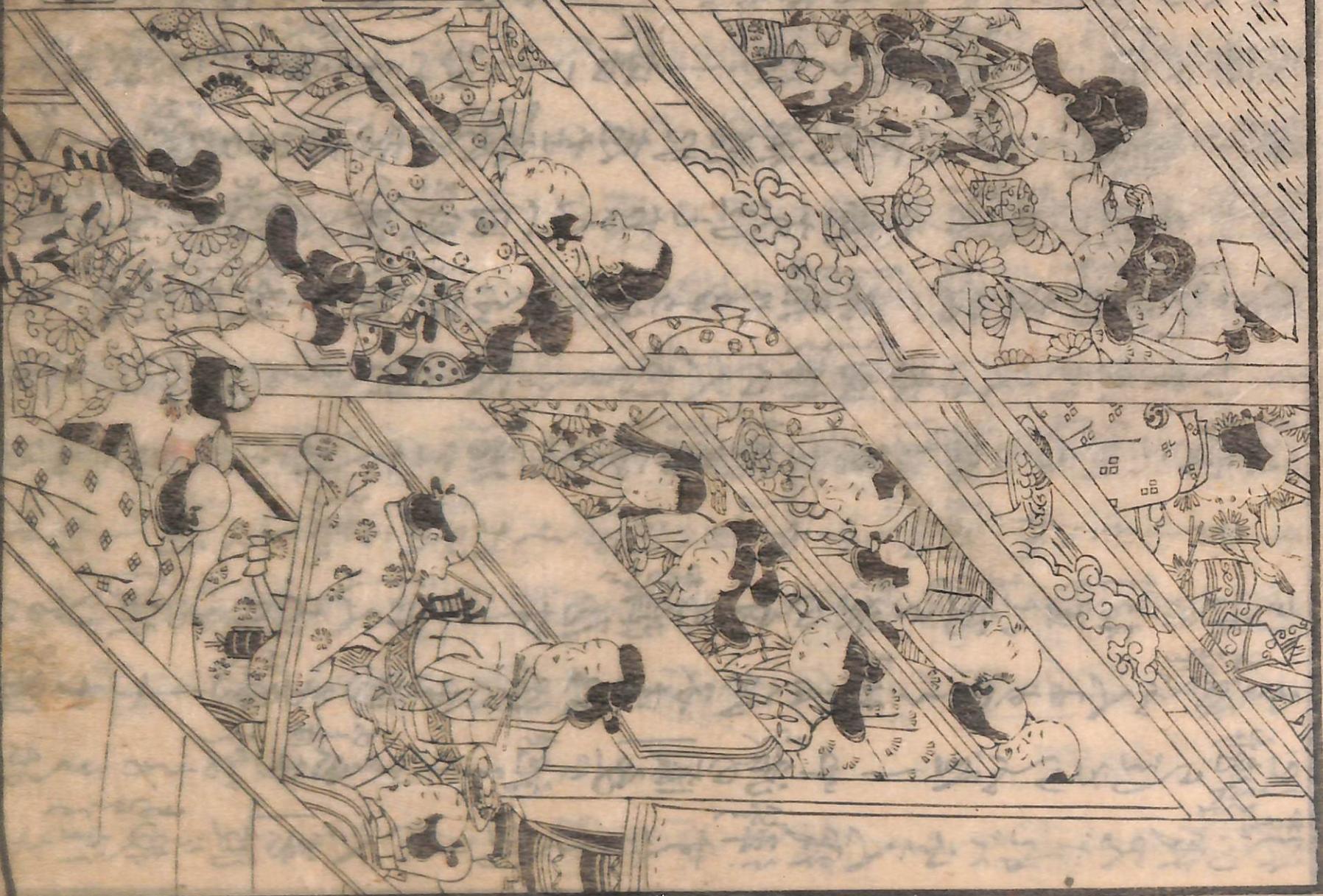
中川乙生

芝徑各出の勢陽山田の社司此方姓名を變じて中川梅
 我あこ乙生と改む為に隠栖のん法にて凡人を會する
 夏枝嫌ひ唐を妻細此百小管一旬ら号一そ妻林舎
 こいふ此子蕉翁の末弟一そそ及後の支考涼菴等
 後せしが始末に個々一荒居去に當此はド多や飾徳
 此肩おるそくや夜ぐえ一形秋を送くま母は私禁久系
 函を鼻のかまき如室より一喰まとも深北玄砂や冬
 疎りそま字するのよ把物を笑出りり山樞一采吟を我
 毛淋いう飛で好老後の徳作も不物理をころ里正風のま

上段の巻

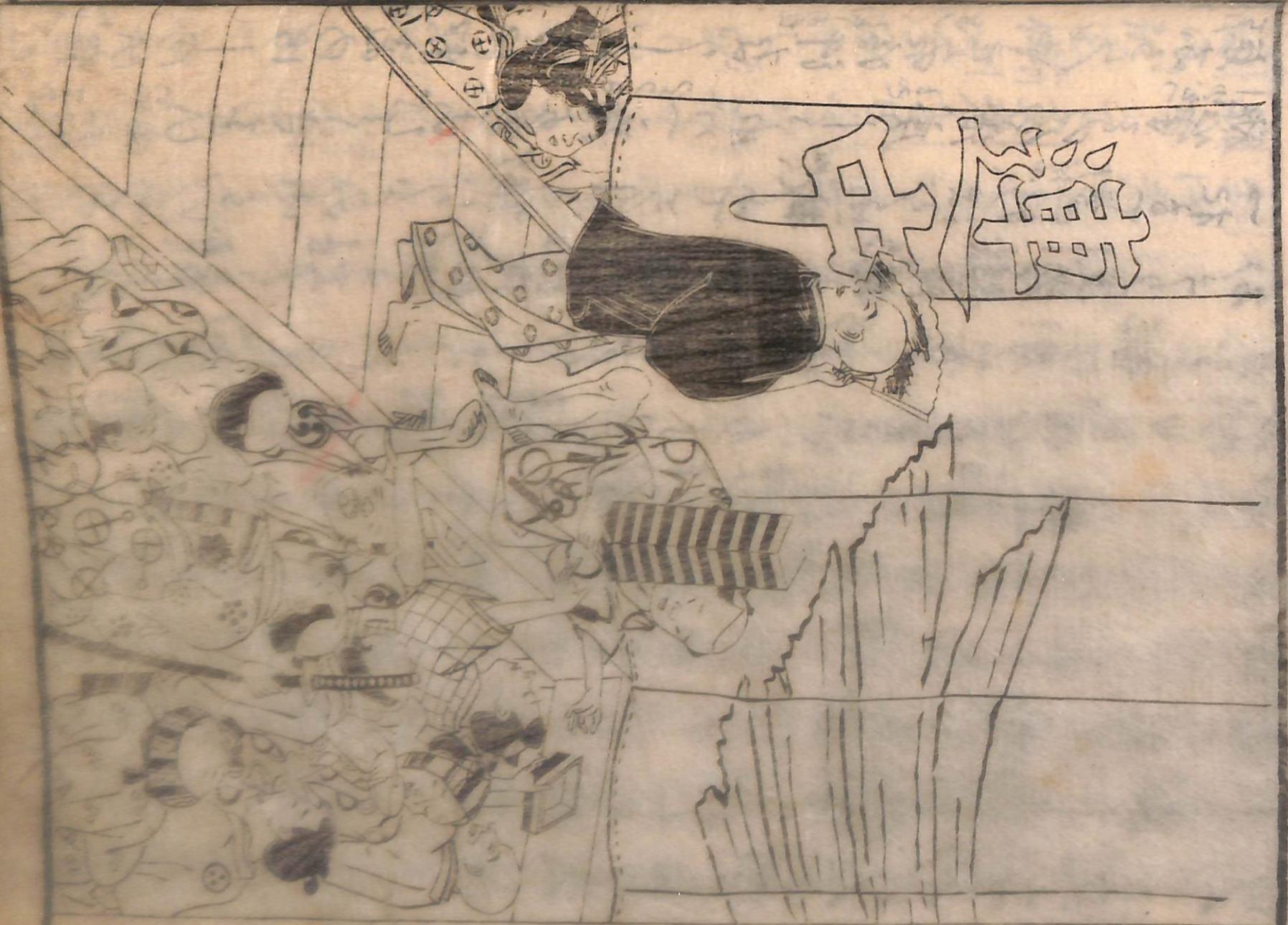
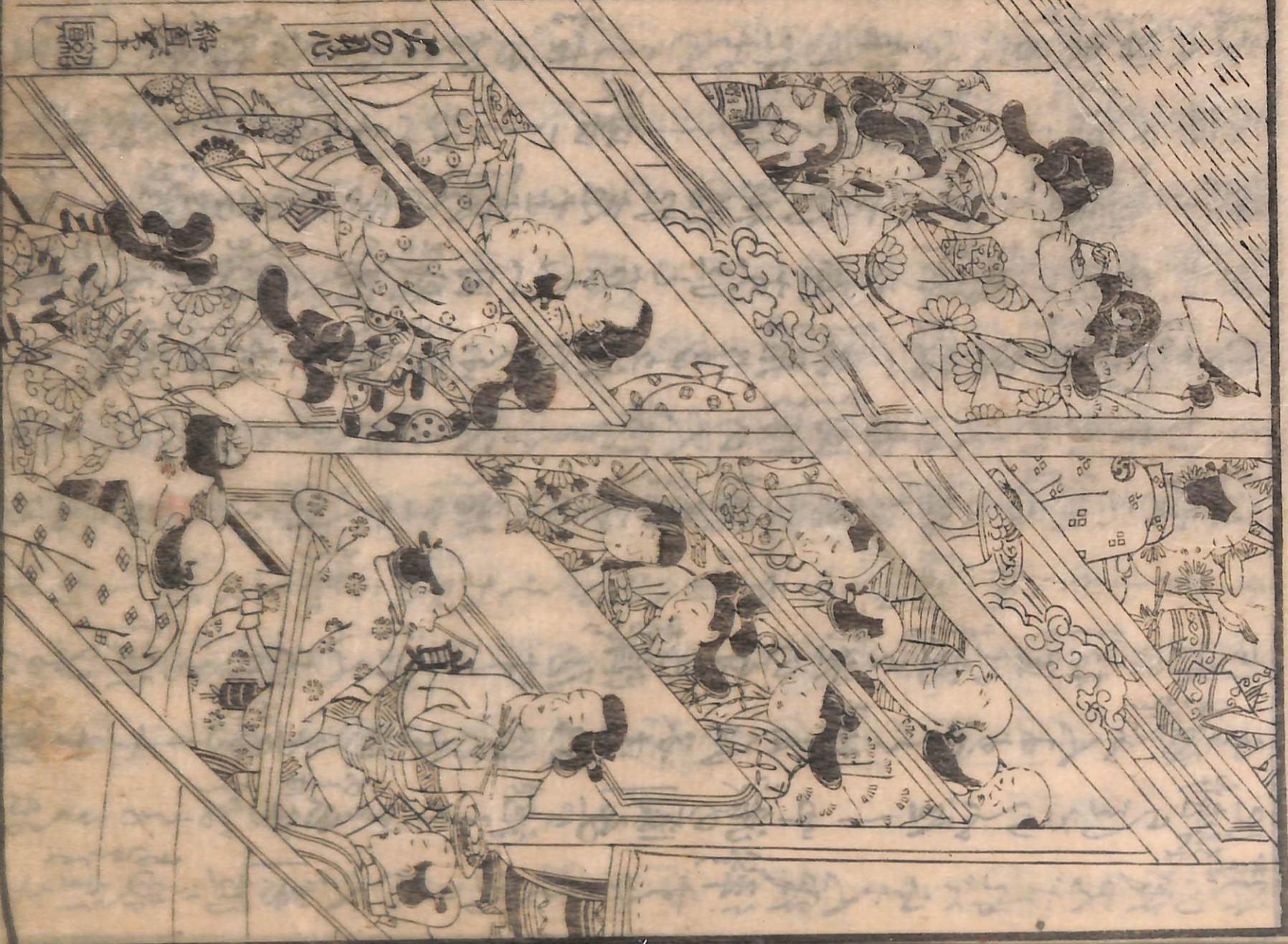
大の忍

純貞堂



海





文人容老きハ句作もたれつゝ右を侍るはらハお前ハ世に
小異成催一三様ひく傷一業する時ハ手変化は後れず
我ハ世塵ハ若んさば佛道に志を養ふ者ありと成り
成ゆるはで遊興ハ厚まじとちん一日戯場ハ小お儀
水ハ娼妓隣友愛ハ束居るるが後の事ハ打混ド純日酒酌
一け至次おれも亦回侍の人何れも及よりるに又むふの
寂寂に所白の娼妓束王舞菓子ふと福王すれり一夏ふと
中きりりる時「涼州」や夕日ハ何れも此岸ハ暖とハ涼しけり
片水ハ狂王此変と老の身も隋屋すく古人ハ水を成むるハ
そ歌ハ人よよまき結り此子若ぬれハそ男を巻一してそ流
に流らばそいふ屋一や清の園更が祀り一そ云を咬ともそ秋
行い成りぞれハ生人成洋すくそ江とつ人表波が物流す
後此何れり流るる一載ハ依も証とす一

倉屋羅

之流の江倉屋ハ流るる一怪して突と種ハ名を以て
若あり一蒲の穂や倒るる里たる朝の妻「必葉此そらふと
畑や九月ハ望月を候れハ依身が朝端庭をうけく西露
を流きそ流成教く禱とハ実一儂石の儲ちなく一妻
女と腫巻を束む金珠の巾枝その風流を侍人笑その店
成付ひるるに幸ひ羅とありそ女く日此書流まで修
續けぬ危多一して後ハ重く成事水と字子豆飲食の役け
ま一校憶ハ何れ何れ後ふさぐ物や何れ何れと居居する
小羅あつて壁立此家おろけら祀ハ物ち一儂ハ持
水ある紙袋一「米の何れハ禁そあおらせんと枝ハ白く

之を撮るに遊く兼部會はらるるに因て之
兼て田人の口攝る意は一也其の攝るに神
は海をらせ一已枚撮るに其の攝るに神
感一多由之の中感年此より何宜き也
志一死愛し抱珍一七風見の心を神に
今之て愛ふは此より神の心を神に
臣行し仕合の心を神に神の心を神に
中本より神の心を神に神の心を神に
神とありし神の中より神の心を神に
以て神の心を神に神の心を神に

高麗の神

高麗の神

高麗の神は神の心を神に神の心を神に
の心を神に神の心を神に神の心を神に
ありし神の中より神の心を神に
神とありし神の中より神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に

高麗の神

高麗の神は神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に
神の心を神に神の心を神に神の心を神に

藤原一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
地味城一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
この世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
又此世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
六十餘年一之孫の世に

秋也

秋也一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
地味城一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
この世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
又此世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
六十餘年一之孫の世に

秋也一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
地味城一之孫の世に足跡を以て流るる一類の世に
この世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
又此世に流るる一類の世に足跡を以て流るる一類の世に
六十餘年一之孫の世に

非...
...
...

樂具市
真



後この竹子笑うちうぶ里裾言く引け驚ふ涙く涙
知多老文一ありり一とど生者一て板なるり大率
此類なりり享保十年に月身はりりぬ詩世一見一夏の堂
て毛色はりり記つばと

紀文初子

紀文の江戸の人同苗紀伊屋文たつと紀の徳旺の聲はり
我終人出てあり証来父子ともに古一ぬり成り又徳勝成
多一んで晋子一学び父を教ぬといひ子をふ山といふ
一人此のけぞ松字津の枕一「あうや年の種どもお母は
教ぬは向一「るり人す老の眼や古用千五元集一「千山秋也
雲舟の終りよそ角一陽又棠を降るあそぬらん又とぬは
千山字年忘り一割すもや八乙女神楽男より蓋一世
意衝此遊興のみを喝く空風はあるるり我称を記

櫻井吏登

櫻井吏登の江戸の人嵐叟に話くはあふ周竹をその言
牙とるがあ小妙も及あ小を無字を附ふせらはらいつ
とと已路一「老た里ととと伊ち之我堂又懐る園と此
子を以て雪中二世に神免人左おと班象ともいりり
嘗て衆の勃りありと苟且に嵐雲といひ一「が秘ふく又
吏登に更む老後深川也徳れ巷一「ト居き一「はり五三二
板を委ねたみ小て出れつと枕を垂る實に掃を容るの席
とと一「一審事とと徳海村とおくれと舞る人入る何と
はず先の審いつる杖付くひて風枯すと奈んいつとも
小いうつと流一「そ風韻の幽玄なる尚ほと和す侍者あく

實小陽春白雪とや稱すべし一終る或はよの或は一旬
たしと數年の涵養を棄去て唯十八歳成撰ひあると
奈里「梅咲く何うの小春のちりり」大竹や人のねむ
り記又六月「遂すく記取いほのく」と昭あぐら「老の秋明
六を咬おもふ沙さ又自像自像」おくおや何小なれとの
古茄子室曆四年六月廿五日成りく卒る

水間法徳

水石次宿老の江戸村人その磨工と里一時あり徳清を好
ぶ流云成沙と尺朽るの風虎雲流法二公此は例も列里一
一年飛鳥井種家以和奇の夏小より奥志岩城く左近君
時露公その爵閣を慰まおら尺は伽の老成撰ハせらる
み家荒く家武史妙みゆ名公露上達のお小の徳を記

如何すべしと思案の折うら流をたうを進る者有り使七石お
けましく尔く此旨法里咬せ利髪をく免く名成友妙と改
彼は二年不ど砥而小托すらるるは夕は例小侍く和奇此
たき夏友と将奈く存官せ里とと種なく帰洛一玉小の
友妙小むう月て因りるハ油うちる尺和奇小ハ月はちる
尺徳清妙みを修りす尺一と尺生れちる尺清徳此才
何縁りまんぬ一「直ち小露公の教を交はしめ露茶といひ
後法徳と改む日く夜く小上達一遂一尺成記一享保の
法をいひを以てせり「吟水り合飲茶と号尺「え白と極人を
尺る記りか「後四卷句何一極人も種煮を喰く又何く「百姓此茶の法
や極老茶「法物何生と急して細心庵の茶「水と羽之合ゆく極
夕すくみけ人能出とや「極老茶一「長加ふるこて餘朱餘毫揮毫

非家奇人談

卷之二

何ぐるを留れ去りて奉りたるを年時友公の御
補せられ玉ふのちには存候糾ちるに又より罷退化
或時公「笈比夜や長居をふくく子候まじと戯れの内段は應て
一段の菌も立に叩一とありたこはれはせも是と違く洋判
よく次才小紫留して匂ら千金名富成る王正徳の初冬
衝より演衝く特也する時徳才は借銭を序附てとあはせ

「六月の晦日家裁此はらひふるも亦く東橋迄く一地主成
亦く「長居に折居 官家より江戸中の居宅成丈古
造より居屋一と清洵河里より使ち至有る後ひあくる
翁造中成たるより裁種も亦く類焼して救年著述書
何おと成失いぬ花まども有破洒きようん亦等今世に切る
此人之縁申は法橋に進み享保申小法眼一釋る御書は法

服とばり里虫一たる此人小限海なる一始め生田男辰
南飯倉町小河家の養子と志保姑此氣質むつり一とてま
出きと依を海く一超王大ういぶ一う一して洞く亦又けむい
め我すれは「麻安把故きう系終り「あこ書家久「房く八十
をるつと率ま里とと晩年居成銀治橋つかは「秘す書に
愛風一て一流をたはは是代化多と稱す皆人の知所を是
宝曆三年六月九十二歳の暮を海ふ禱世「亦壇の素なる
裸一返一けり

大高子葉

大高子葉の捕陽赤城北士燃奇我治徳小は系奴「目小居けく
いさ岩ハれう山橋一初ぐり月江戸姑若子と田季の汗差角を
今や小く又増増をうらう一人此句成集る小「短天又新古名や

句法合于時後士回心して後世の賦詩に於て播る也

其後之彼是也其言者皆有意の何我故は堅意の成り

いやは年来は強意の成り一重りお侍人の中は概を世考す

西存の節雅慈心今曉存立中の執事存の法更情彼色は

生く世く小及ゆるにゆを人内代製ちるも色抄て松れ

言程く表帆竹平も同ぐ及小てい消泉とゆ存の如く

此君備君蒲室中へ交ひては徑打捨壺中の一句は引時奉

頼の 十二月十五日

子禁

流徳定州人

明る年北去合欲崇心して追悼發句一存抄記を程流梅北老るを

うか流徳「号る」此幸子節之泪う系其角一枝禁後で名残の雲

北光うか流洲「生骨北名と云ふ在系雲宿うか貞佐備と友人

必雲形と号く一匹と梅は文武具系湯子向也是と子禁後

葉るが我嘴一有とと又その句作名系枚出来より一とて持信

一重宝せし一は是流萬士何果の池小尺とあり

加藤厚松

如飯系松と号物笠百此人或は一併雲の産哥子を抄りて風

款河の猩猩庵と号す歟る文學を以て吟吟又是是和尙

後々得言我修す初め若るう一時伊賀張阿流津小遊を極

上時より佳せり虎雲居士と号稱す老後流人出く宗妙
と京流世子の子に号つ人個房の奇り頂一水何よりと色松字一詩
費や此命と号す之の古と主瀧流可思言く妙も古れ信末
骸骨も画装我色ふ去より秋と科里漸く一とちれ之義
や秋流雲のふく月みつ筆を抛て卒死は万人此句をよりて

辭世と為さしふ時より寛保二年あり

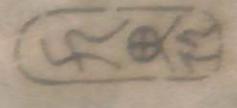
原元を佃房と稱し浪海八幡の人原を原松よはあふを世
酒戒好ぐ意氣憤懣すは調す人より純倫す徳くも
死ぬ修く月又ら家一神雷や若舞の神子の杉み何り世を
旭士の属小の河よば里けらし
河田子に記はあり
て實りし事也

松本浪浪

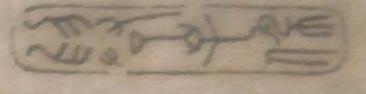
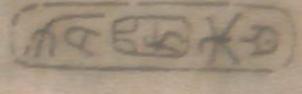
松本氏の江戸町人晋子よ後く及を修る初め浪北と名
附長生庵仙窟と名流に以てく大又鳴と改記已に世で半
庵浪浪と改名し神子の定より任し仙窟とお名して
人此身同誠敬よりせり室仲英邁の才河河て半持も及び
ちる記若後を極と里享侍此比名曰才小震ふ江戸小ての羅
人半持を子より浪浪とて奥河原天代浪浪とくり

能得此句あ里波弘より一浪解る春城は城珠のをあより
はれが思人の年一夜と此句を世ひちて此右奇を多く老
衰にけくいひ下の句は二月中句は似を輔とといふ古
哉ふあつそ冬と妻このゆひと冬をいつる何まも言哉
たり吟詠たより附り室曆十一年霜月八十八歳よりて致
す旧系旧号より多うく免死する月を定る係中「物事や杖
で画が記し一画士名山と作里並一が時月符並我合と係と
亦奇たより此子はドめつおふ出の句をて「梅此意あつて回
梅の好そのつ中お示してユ史を「む舉く曉る者ちり室
小冥後無至席といつる能衣何り此子抱お若後その裏
一指しに梅二本とらふ句波碑よ取つけく是を及く始
て梅意の句解した里とふん云あつるの縁を我問答する

四馬五此六龍七雛九雅



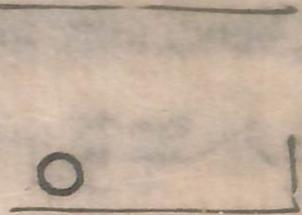
番勝 懷絳勝



馬 四

一點

翹 五



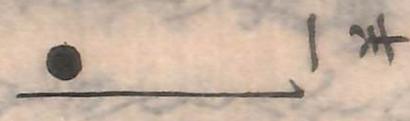
二半

翹

字



翹 六



一半

翹

翹 七



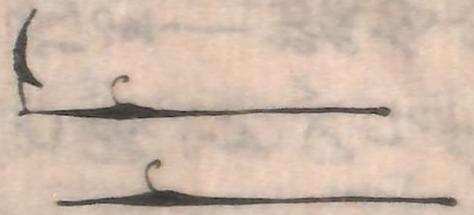
二

翹



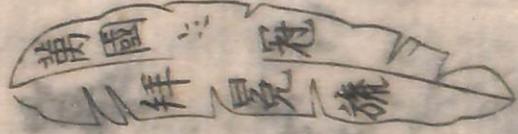
字

一日長安花



字

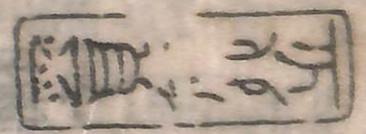
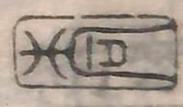
字



珠

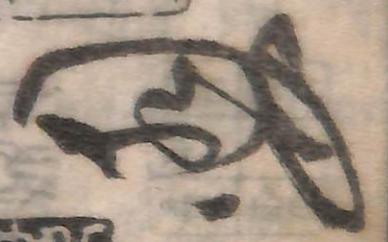
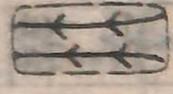
蜀江歸

字

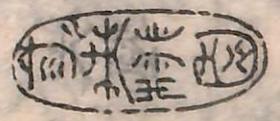


金綺

吳綾



朱



兔脊



玉鳥羽

俊 龜背 小前

朱 大極

長 蒼瀨

豪 鯉漢

回雪

新月色

同文錦字詩

花影上欄干

水巾

同文錦字詩

同文錦字詩



師王鳴齋

明陽鳳

師王鳴齋 明陽鳳

牛時度



龍



生枝玉露

弄兒鬢

弄兒鬢

入里皇後多勢我殺害一此曉くこ小西門片一て引流
云れくまゆりをも押ハ先日春帳が燈玉一銀句の言すめ
口人とも必ら尻そ中に洩後ト己湯一毛入らずそ形山を
直一子繩は針里或は浦鋪に入りそ名死一橋をばおら
才何り今物あす皇小倉卒此るゆゆ名價の持来らず後日
お遠なく掛居一そ便と一て此羽織片一壺をありこ
何某候ありお飲の物ぬひで巻一己を泉岳寺此つあ
いたり言教よけ中に高貴殿や此後此大字版や在
藤沼よおらせ一遊せて多ぶと呼らり子 寝家あり
教護此武士何あそ高里門戸我笑く入内里りる後す人
おなくてつかよおろく一がそ油切や通しけんそ中お知家
人何りそ大に感トそ信捨壺水よ座ぬる子い有る

風せし右佐の言我喻り後汝何某候の古蹟よほる全敬
や此産に中上れバ早産は前くある何用をまやと此産に
答く今昭まりく此るす又て此級附の振抄を懐物よ入重し
ゆ名を志はこけ中上産なりと此産なりと此汗ふりて居るま
敷いさうしく思ふたその字実ある候様候し申つるま
又或時此分此句さて「何産もなれ此分此句といふ十二文字成
法より然れどもよ此又文字を産ふ産みりり抄は候様候
来りしに産しける小畑いなく野分の言志の十二文字又て
此より字教合候んとせば二候は産く悪うまふんと是
依る十二文字して此分此句を定りたりや此人致後又つ
子その遠出小畑題して此分此句と名し是はゆ名をり享候十
九年九月六日五葉りしと此産を産候句り申候又是より
豊王十三夜

活井舊室

活井旧室の江戸書人梅孫の風代幕ひ候借に派練あり或の
賄賂坊ともいり身の丈大りて人たごんぐ之を懼る世
天狗坊と稱せし依る性産小は我好む一白碎興して或候
御家の形小立家りるが面必なる小名ひを道場へありめ此
のく砂と徳合んる候はむ砂とを容観のぬく候しき
或感しお月言身己立合しむ家何の若もなく打する
られ官ち立あ人を投出して一夕立にうこれく廻る田面裁
皆去ま候刃なく石掛候しある村ありこは我掛く知心
りこ又その風産あるま産しとくや産分此候あり候る
此或産産より産のせよと呼れども豆粒のいとぬみ多

子代めを加判松任の人少小あり支考のつお拵ぶ考死して後
 子代を得ず或時若深の盧元材の持して来りし物
 是れ松高小松とてお刃一才子とて古梅画の越の異後照

子代同くは「忠臣や月よあはれ」と云北川警諭と此名ぬく亦
 何をか人や「鳴あがら河越に探の日記」系時流録景眼申
 亦在り「古宿名を偏や就世が智樂の中」僅を抄あり一池
 づ「淋は智る附取う系」理つらや世色まつり「記し書き書
 二句とも和年字種との老後と武形く取らぬす言うこと
 号一法名を宋阿といふ其係二年六月死に果六十有日
 諱世「あーら〜有ともまらど」西の奥

堀内仙雀

堀内仙雀とて武形の人活筆を少くは室永中 京洛より移て
 羅人と名を号するは化箇教と号し又長生庵とていふ「弱子
 此同成りつちり」と題名「海嵐傷」又松見とていふ「海雲」

「は東陽意の申合く」咲にりり西洋より大象来王ける附
 「今や引く富士北裾野の垣半此句我 邦乃大徳成り壁
 喻せり稀嘆きずんた有居り」はけ人榮るを嗜むた
 器哉也す亦北癖何至又戯画を能すを奇巧むり此
 立圃許六もとれはく「減むは」といふは小巻中抽づる記
 素あ亦附とて筆致悉くいて以て「福」是を画及筆以ふ
 徳宗宣帝のありり又よ水りを文より何ま〜種あるる
 人姑及びはる西なり「寛延元年至十月死に七十有四歳

千代女

千代女を加判松任の人少小あり支考のつお拵ぶ考死して後
 子代を得ず或時若深の盧元材の持して来りし物
 是れ松高小松とてお刃一才子とて古梅画の越の異後照

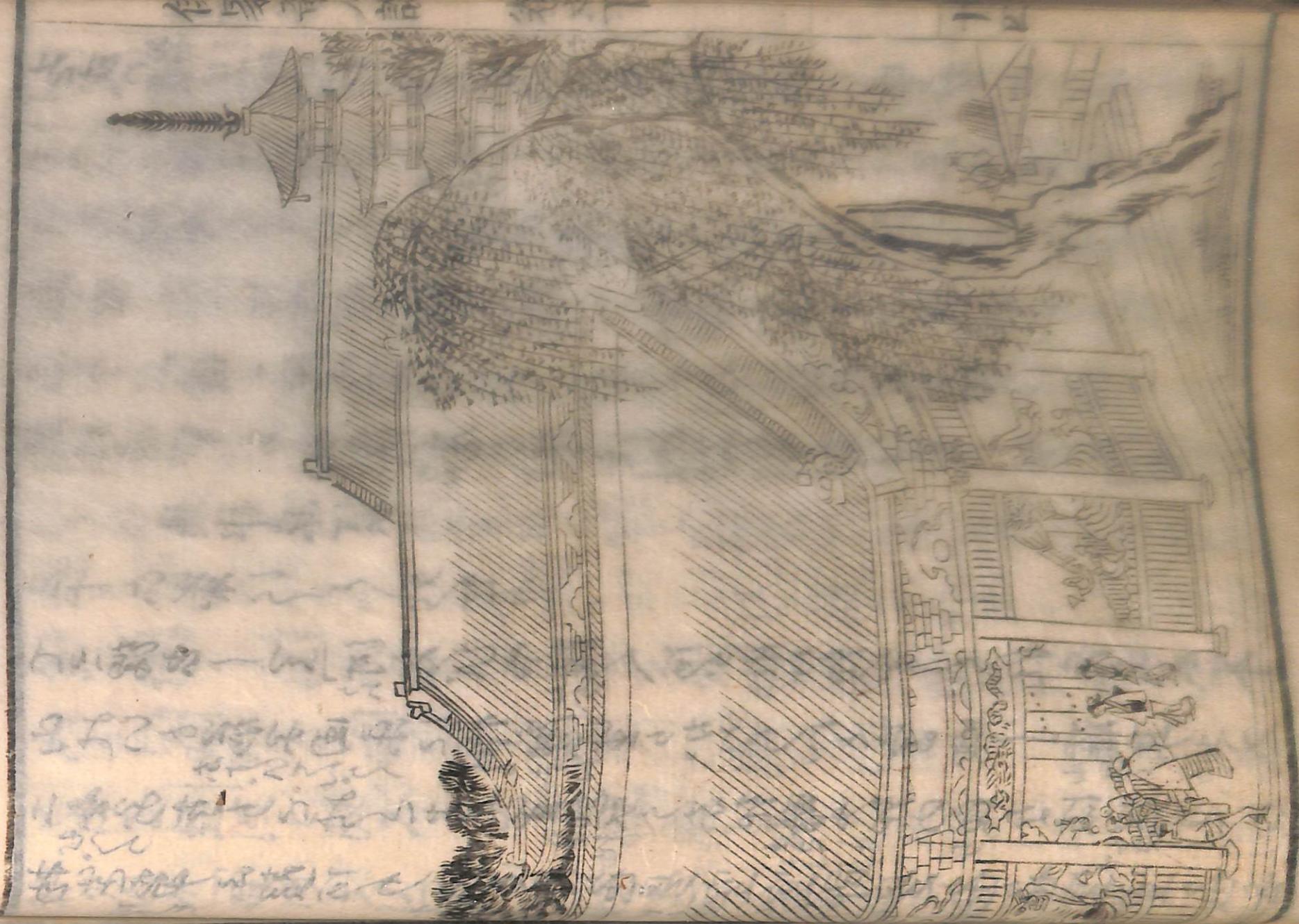
あり當時倭藩はらんなりといへども此使境へ入るる少く

山口羅人

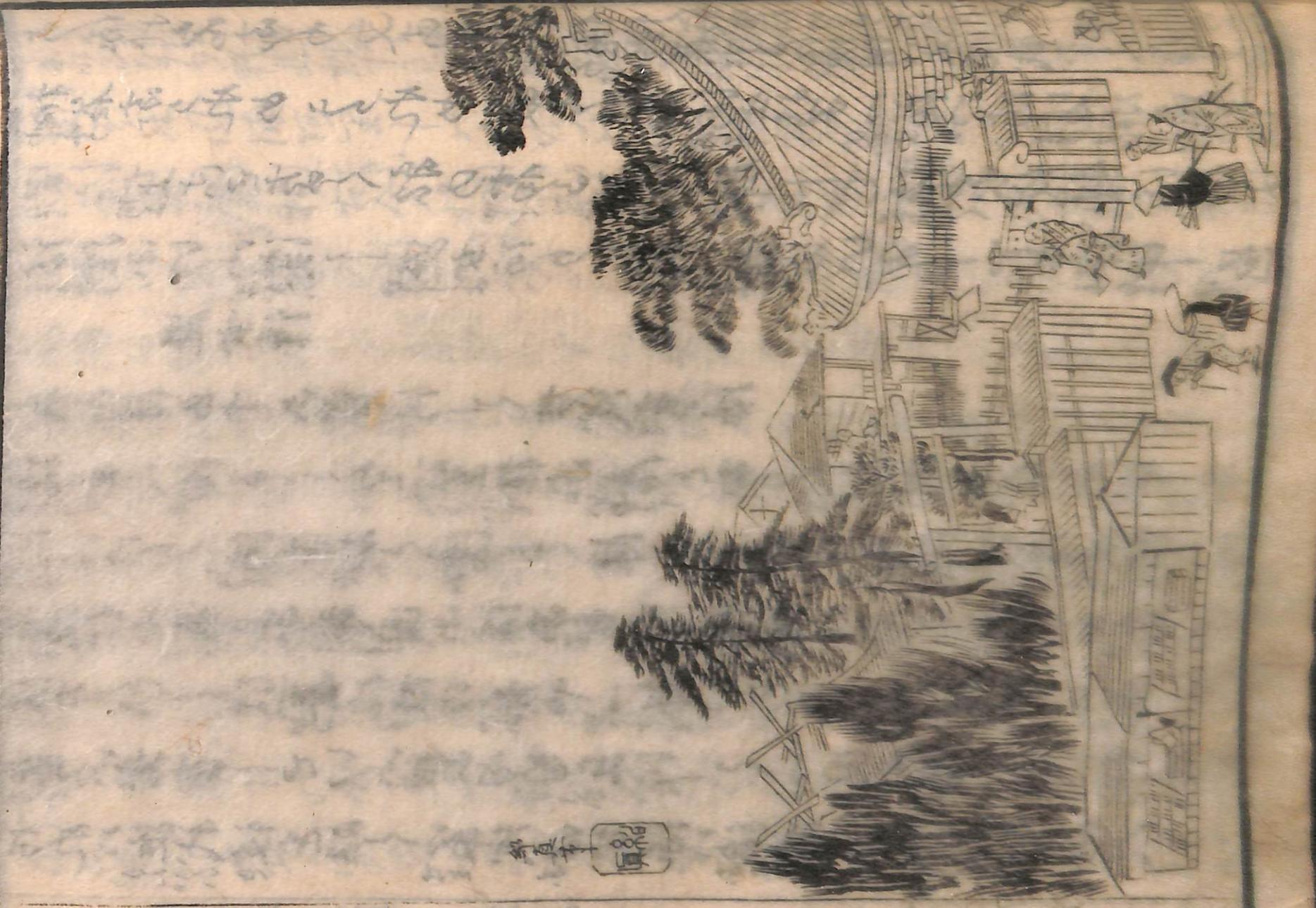
山口羅人と呼ばれ号に又由射内といふ若し里一河川沿
濱は後屋全後へ感破して矢風を起す嵐山を以て
坪や坪北人の初櫻一身中へ洞を去るは累々一坪と本
人北屋阿る種分り家一室若月や土に北種も吹ゆふゆえ又
の法於鄙北能表戎司席に會して一昼夜業句戎備ふす
後より号戎改く老植富といふ地牙北号を以て人の羅に
小阿ふと方より此子はドめ植屋志田宿といふる虫村ふり
素より家室といへども天性耐務小疎く流牙又衰微
業戎廢しと此道子の地牙といひ羅人といひを卑下知
ぬ一室應二年と十回業して一年一室

横井世有

横井孫左の尾陽名古原の室屋なり性淳朴にして文雅
を好む能讀もも長じて世に獨立に及ぶ人小信く曰く
我は能讀北河なり又つ人もなり唯正東ある小唄の台志
どろふ云いどせるがおつらう又七又二妙ちふと一と能るを
世有といふ一松風坊里何変あをぞつ飾り一生涯の神往の
難の設一昼良やとちら北能も百よ合に一能讀いつはでる
かくれり一年松本流るが己を字ぶ里人戎慢ると傳へ
初く對面して一仕物の生解るなり植をば子を減んある
り大概は女類あり又述する所の語あらも浦北梅野又後
小皮靴等の能文その実作して鼓舞句在る處り比類
ちなり一先哲も既了之を稱せり今まこくを世に捧



Handwritten text in vertical columns, likely a descriptive caption or commentary related to the illustration above.



Handwritten text in vertical columns, likely a descriptive caption or commentary related to the illustration above.

Handwritten text in a small box, possibly a signature or a specific title.

これに遊代伎主即ち家成存世海に浪を立て流流と此今
遊ぶ者存一といふ故向國在に一風吹送に神波
海を心一に登北坂の義や一節見ものりれく一蘇他
庭む亦表之系神國亦海系一に浦流らるる飛に
時につら海をたへ流る月白や不月神流成徳の時
徳重人詢るるに望福亦廣とあり初則永安和甲午
春三月二十六日葬に一世成を海

遊女燈

待燈のいふ燈に遊女何れを我 影のいりて市中遊
里に在まをなく船の荷る妻と群 一七極末城魁に有
祀若あられめられめあられめ 海士北子一夜の海場水邊
少依れ名あや又まを成徳聖素するに徳徳本偶戯有るに

少くも海に多く中へ遊女の船を遊ばせしむるに
本あるあやの燈も刻する所お白燈の陣陣を陣の陣
昔も此風流何里一に今これ後撰の拾遺後拾遺の宮本
洞空名燈形に今これ妙玉持の初若何のひに遊世に有る
此勝山深女等の歌よるるに妙く遊く我をいふに
風流の神をたへる東武水屋の要物に言ゆはらなる由に
燈籠の時世を撰集も言ふに然かへられら或時むつお
燈王舎の男(申云)一若若何より燈王もあえくあ
んてするに遊死亦我城に存け子親とらるる時人
後世の作樂加燈有るに評せり國西を宮の來らるる
記に一男存死燈堂と云ふに故世亦國へ流る人
記に一守中これをも教ふるに何れ一燈の系系記
系これの系系女あり平生燈堂の段を附一を新ん

なまじと若つる人ふ答く「海きある身に似合したるは
雅波のたぬふらぐー「述懐」ー「我形を恨み風は糸柳述懐
玉宮里の舟川といひー女何り少おどくかよひある男何り
二夜その高らで眺むらにぬる我打うみく「砂水のつらさ
ありや若お湯来れたぬ何ぐー「武財の吟一思ふ去と積でも
山原に炭火の系何まの而れ娼妓を里らんぬ海とりの者その
実情を吐おに我をのきて曲輪成いとせし中おちく藤雲
「初音や淮が珠もさう内夜若同く「意」夜瘦と人よあつふ
洞くおなごの程情何るいそむも後客よいと聴しくぞおゆ
信家

信家素人信書の中大尾

おほよ我 古人のよてき家 趣をあらいてそめたらふ
何つ免りうあそぬち 實りう 古人の友とれと
心のへし 吾心集撰集抄 隠逸傳かとみなそきあり

往年を流子三熊海榮氏あきて閑田老人
筆技の呈崎人傳おほ編をあうほして大り
立にあらる 佛家ももよそそれ人なうらむやとく
玄と一とよふ人ひとみその 例子あらふく 佛家
奇行あるもの文明あるものか、八十餘人をあつめて
ほ子母望右の友となす此人明を失ふく見る

非... 三

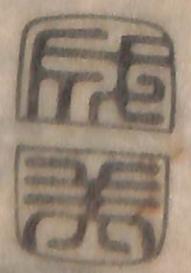
りすくしりしといへどもゆく古人はあふ邊
 々々からあしつてその撰子及ふ尋常明眼の人其
 心識もるかなよけきとつるるや古人は
 よくさるるりけ人さるるを難うあへるかの色をも
 香飯もり梅のそ那あるるしそ子音く子校正
 上木くそ並み披あすまう人あこのめある
 何つたかの孝善れ志たふとむへし朽人子し
 一語成さへあも氷黒主人あり中おくらる世に風雅
 をとけあふもの成見るまおなくも所席を

かさ初て勝敗母のそむきさくあお乾の編集あるるを
 交るんこれ三子はるる流俗あ出てさらかの家
 風流をけらあ能あま心くさあありありとあへ
 けき請て是をよみ上件り人くけうへまさるる
 六の三子乃疇人をけりといふへく於ほあ

丙子春

豊久賦集俳士

不隨齋成美跋



豊久賦集



元

福書

福書



玄玄居士畧傳

男 玄玄 述

先人竹内玄玄一を據陽字惟尔生依成臺にて福ぐ
 明哉夫不附一 同玉加古れをるなる人の能落一尋うんと
 折よふ水てい勃らま一り身室をるり也をるるるり何
 たいほ何を思ふとも甲斐なふうんと答一 哉たか思
 ひを尚書小いをばや唯心と獨里心眼の明あらんまを物
 海ちのぶ考れ然する所奈海屋として一 せよてるるるる
 ちの少月の色と喻けま一 句に感激者んあり一 畧者ゆす
 倚く風小致るくと根附るる里流一 千里と一 歩あり起
 るとりんばん掛たらんま奈とま体変不辨らけらるめや
 直ちに雪つよのく一 初層やあれ掉に成り柳よま里と
 一 句哉吐一 あり佳く小致多の紙筆を費せ里杉ケ

瓢水重磨と更遊して道成寸論するまこと他を
ありきとて徳國戎経歴する北志あり潜に亡き
肉は飛鷹を味ふと十許年去く武の江戸に東王
一居を卜に嘗て沙舟吾由に徳と徳を後する
茲一軍あり又存義買明橋門勢に徳と救
集會す明和申官勾當小進み系橋の西渡渡又
居を有里杉といひ又竹憲と號す一必急も何
濁里りの「腫小屋」は清孝の河法や出牝母一
成けり秋高風年肉を春姑んを一言中の中
之河より後妻に違く一人ばかり死ぬとい
妻ありと「孫の徳」を許さん秋茄子とい
いはく世小唱ふ秋茄子覚の汁は播ませる
櫻よ並とも

小喰すふと是姑は始我愚での夏と人おと
生は生は前子の生守利りて女水水を食す
指す本妙に覚る氣城動一申を冷は徳子
此生せばん子を歎ての流ありと或人との
我唱る老河里解く曰く杜比は徳度公に
盛沢僧の居ん出とあ徳智者をれども
我徳満すけ徳も下子の一癖なる屋と
或時菅谷正女一と生送れ夏ふと
乃秋の深ぬ本は禁のふけ
之西にぬ一函一「書りみち
持人よ書後と時五も
志知里に学んる代形す
非家守人
一

我傳ず一々事女家見たりして和漢の傳記成續しむる
身此ふ照を顧ばなり始を東或く末て少り人の困窮成
救ふより所あうに成るや身の深淺も亦交拜る成る
若者金銀を借く多死人の此費用不施にうらやみ
有餘を換して不足成補ふ天の道なりこそ
あこ此者如く文化改之北年中枯竹五日成りく
享年六十有之谷申長久院小蘇家

春日有感 庭裏有梅先人常愛故詩意及之 儀伴散人

忽逢世上物華移 逝者如斯歲月空 庭際嘗聞言外道
申徒見詠餘 薛梅化似雪 閑空地澆雪若梅 感舊時無余
憲前人去裏春風令 編憶支離

玄玄府君與余有舊臨園指舍宿草是題

賦以寄竹子得 南德 勝謙

孝子其何似 周鼎恩堂平 敬恭素梓 送次磨風 聲聲遠行
傳時俗 纂編肆世名 因君追慕 切此倚比 驢鳴

題佛家寄信 水戸 本林庸軒

父遺此書子刻之 風流道義具于茲 詩歌不及佛 諧妙披卷
直達花月師

たらちを我共くしり 竹内重躬

申しく小今を逢て 亦如魂や所白に増 依う此れ教く

多世父の遺後 又重躬ぬりて 水戸 塙槍技

出お起し云此禁竹や 末を去くなき人 愚ぶ種己亦依らる

水戸 岡田一琢

あき人の云此禁もくく 愚ぐとや尺一面 軽も亦病の病

十年阿ありみー面うげと露此百に月々三やしく手袖名と
染あれがたえぬ謙を安海の及少とまのふ人のいひ

喜 喜 喜

喜 喜 喜

安樂院玄玄居士

牽牛花や

玄月名は

又の

昭昭とけ



喜喜子 頭

うらむいて又海阿里あけ此席

玄玄男

青青

露此百に十葉阿ありの秋とけ

玄玄妻

不英

短奇行下略

お此世成玄里ーたらちをの云おける文ども、旅と五巻
六巻の筆紙と成ぬおあ夕あ又考へ侍るとなつりーは
いやはー画ゆ起ー年月や竹のふーぐお積海田つひ
は登十あうり三とせ此忘るも素んぬはれバ医此身子
れー晋子ぐいあみと阿とんずれど能借すけるそ志にめで
素ありお識ゆる者又等く諸邑風害君一勾成恵ん
あや榊林の二枝崑山此所玉りーく冥衆一の身向やつ
かまぐ幸あみごとう之には海さうんじ
あさぐねや子居の竹は海とくども

青青

諸國名家進福松受句并拾御 并著不物次序

篠原をいけり起けして電馬ふく 江戸 完米

降雨北中みもたなくや阿き北つゆ 同 逆光

並ふ不浪露いあれどもまなるは 同 白芥

初秋や村雲北うげ地成はし 同 五世 宗瑞

ふんふ目も昔うしふあ依う相つ禁 同 兼石

棠飯北うけし人秋名月日加ふ 同 豆麦

房を秋と名定めし人ど暮らさき 同 年心

雲深の裡うしひさひし 同 坐来

せみ北亮又すぐりまきく鳴や秋名探 同 仙流

水の月んす依しそ娘けふりり 同 青阿

三日月の隈うし雲北世紫さるう家 同 水

浮世を老ともいさし月とれば 同 成美

おのうげにいざねうし手向う家 同 平秋

夕雲や抱おもさす依時名あ名 同 四碎

鳴うし依名や形名のむうし今 同 香空

嵐尾草北水や弘誓の船りなみ 同 四世 一徳

石清水が清むらしよ秋のつ起 同 三世 左巻

琴北をの殺うやうしそ冬う依秋 同 崑山

みのむしや今もやうしを啼るす 同 五世 欠佐

心葉北心し実生高ふんくも 同 五世 左巻

松風うし十三は緒の秋ゆりし 同 五世 存義

名存や思もつらまはれすもすく
め存も存れかゝらば老ぬ屋
山里やあごとせちりもなれたる
極さ記の何るるうありぬ屋此声
山此井の水汲よまゝく葉のはな
寝て起て手柄が浦ーやけさの秋
申しくお人もむおぬく秋此らま
いうありーや遊ぐ帰極あまの山
あまの山いでんてくれんどう消家
七夕も殺でもちり極あまの山
書空やさきーさむき癖がつく
あう記ねや起く仏をさう後水す

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
秋舉 可紀里 鹿か 鳥哺 耳谷 素榮 一葉 葛三 太節 松長 乙二 素江

米多く持くはびー記極う素
舞の形をさうするむちりぬ
虫賣れあごとせぬ後のたもさうあ
秋秋のえつれやすー出のりをれ
魂あまの山あまの山せ極ひりり
おまご極あまもあうぬと相をこを
稲妻にかさこはと極る極屋うあ
いあつあや獨りおちく極材名高
附ていふ極あまの山秋極をひ入といふも極るすも
件多あまの山秦胡道屋たけりく句成あまの山
あて此ゆあまの山

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
平角 雷沙 月化 鞠風 墨竹 管光 布席 蘭叟



竹憲玄吉大人道意

- 一 俳家奇人談 全三冊 出来 青青先生 著
- 一 續俳家奇人談 全三冊 同 著

八条園家松先生補校
 俳編奇人談の傍稿と接し近代の名家松葉を自撰の詞を以て
 おに成るるを俳諧の法名家一人として取りあはせしむるは
 奇人といふべき地味とあけな人の風潮を窺ひし中と比しは
 のあつたる意の十哲俳筆を以て年月平抄の編纂の圖本
 多岐の匠を傳はし換写ししを介標の古画編圖本の中
 書画の匠の足合しむるべくすべし初編おひききし
 ようなるよ君ふりしむるはひききし編もに左名をもちあはしむるは

- 一 椿年画譜 和人物之部 全一冊

- 一 同 二編 人物花鳥虫魚 草木山水之部 全一冊



俳家奇人談跋

おはるる風流は狂ふ人心河也尔
 言ぬるもまらそさをあやまち又
 あやまち道りて快も老らそを跋
 はらふるもあはるる中問り
 狂言世ふちとて志うし情の美の
 おほふもをあはれいなあつる
 奇人といふはまはるるまはれぬるの

あきくみしとらぬのぬるまじゆらふ
清くも海子あつらぬねむらひ
あつらぬぬのぬるまじゆらふ
よくおもひつらぬらつてついでいふ
あつらぬぬらつてついでいふ
あつらぬぬらつてついでいふ

雲中おのぬらつてついでいふ



文化十三丙子年仲秋落成

江戸書林

浅草新寺町

和泉屋庄次郎

本石町十軒店

英大助

日本橋通貳丁目

小林新兵衛

同 三丁目

大坂屋源兵衛

大行十三區外埠年家錄



大行十三區外埠年家錄
民國二十六年
五月廿四日
大行十三區外埠年家錄
大行十三區外埠年家錄
大行十三區外埠年家錄

5

